

佐藤 風雅 (さとう・ふうが)  
1996年笠間市生まれ。笠間市立友部中学校、茨城県立中央高等学校、作新学院大学を経て、(株)那須環境技術センター(本社・栃木県那須塩原市)で社会人陸上の世界へ。種目は400m。自己ベスト記録は45秒40(2022年5月・セイコーゴールディングランプリ東京)で日本歴代8位。主な競技歴として、2020年日本選手権400m3位、2021年日本選手権400m5位。2022年にはセイコーランプリ東京400m2位、日本選手権400mで優勝、世界選手権400mでは準決勝進出、同選手権1600mリレーでは第一走者として日本新記録(アジア新記録)で4位に貢献した。2023年4月より「ミズノトラッククラブ」に移籍。



# 才能は、小さくても、無限大。 郷里の校庭を走る勇姿、世界へ。

みずから「遅咲きの選手」と評する。26歳で陸上の名門「ミズノ」に移籍するのも、異例のことだ。中学、高校、大学、社会人と、陸上の舞台を駆け上がるたびに、そのレベルの高さに驚き、戸惑い、辛苦を味わいながらも、常に地道な努力で乗り越え、みずからの成長に繋げてきた。原動力は、「勝つ」ことの喜び。郷里の学校内に始まり、県内で、国内で勝利した今、次の目標は世界だ。

## 佐藤 風雅さん

陸上競技選手



子どもの頃から走るのが好きでした。走って、「勝つ」ことが好きだったんです。父は、元陸上競技選手。インターハイにも出場した実績を持っていて、子どもながらも、「僕も(父の能力を)受け継いで速くなるはず」と信じていました。小学校に入った当初はたしかに同級生の誰にも負けない走りだったのですが、人よりちょっと成長が遅かったせいか、走るのスピードも、「一番」ではなくなっていくんです。次第に、足の速さを生かしたスポーツのほうで頑張ろうと思うようになって、中学校では野球部に所属しました。

体格がまわりの級友たちに追いついたのは中学三年生の頃。そのタイミングで学校内の陸上競技大会で優勝したんです。久しぶりに勝つことの喜びを味わって、県大会に出場。自分が真剣に向き合えることに出会えた喜びと自信が今も生き続いています。

高校で本格的に陸上を始めたのですが、最初は全く結果が出なくて。「自分の力って、このくらいなのか」と落ち込むばかりでした。でも、練習を続けていくうちに、だんだん結果が出てくるようになって、高校二年生の時に初めて関東大会に出場。高校三年生の時には県大会で優勝しました。ですから、大学で陸上部に入った時は、「そこそこはやるだろう」と思っていたら、大間違い。県大会優勝のレベルでは、まったく通用しない。「大学(の陸上部内)で通用しないのだから、全国なんか通用するはずがない」と思い知らされました。

その頃からですね、自分の立ち位置というものを意識するようになったのは、自分の位置を確認して練習を繰り返して

「まず身近なところから一番になる」と。まずは百メートル、次は二百メートルで、というように。

僕は、遅咲きの選手です。速い選手を見ると、「持って生まれた才能があるんだな」と、自分の才能の無さを嘆いたものです。「コーチに恵まれているんだろうな」とか。でも、それは言い訳。大学で競った選手たちを見て、彼らが自分よりはるかに練習していること、自分の努力が足りていないこと、自分が本気になりきれていなかったことを自覚させてくれました。

国内から世界へと意識を変えたのは、東京五輪の時でした。社会人選手二年目の時に、世界大会の代表に選ばれるようなトップレベルの選手に勝つ機会があった。自分の走る原点である「勝つ」ことの喜びを再認識できたんです。令和二年(二〇二〇年)、コロナ禍で五輪は延期。選手の多くがコロナに翻弄されてモチベーションの維持に苦労していた時期に、僕は記録が伸びたこともあって、次の目標に向けて自分のスタイルを作り始めることでモチベーションを維持できたんです。東京五輪への出場は逃しましたが、五輪翌年の令和四年(二〇二二年)、日本選手権の四百メートルで優勝、世界選手権に初めて出場して、四百メートルで準決勝に進むことができました。

二〇二五年には、パリ五輪、東京での世界陸上競技選手権大会があります。これからの三年間が僕の人生の勝負どころ。僕がもともと持っている才能は大きなものではありません。そんな小さな才能を努力して開花させてきた、その信念を持って努力し続けることが必ず世界での活躍につながると思っています。(一)

